



はるか／田所稻造
帝都からの声

登場人物設定

(村上家のひとびと)

村上 遙香 (むらかみ・はるか) 昭和12 (1937) 年から眠り続けてきた、コールドスリーパー。とっくにお婆さん年齢なのに、見た感じ、ぴちぴち10歳代。特殊能力を操り、大人達を困らせる。一説によると、日本橋白木屋百貨店のビル火災昭和7 (1932) 年12月16日 (遙香11歳) は、玩具売り場で彼女がダダをこね、呪文を唱えたからだとされている。実年齢は16歳。現在、神奈川県立都筑丘 (つづきがおか) 高等学校2年次編入学を果たす。大正10 (1921) 年7月10日生まれの、本来ならばお婆さんなはずだが.....。

村上 慎作 (むらかみ・しんさく) 大正～昭和初期にかけて活躍した、理学博士。コールドスリープ装置の設計を担当。遙香の父。慎一郎の父。物故者。

村上 栄 (むらかみ・さかえ) 遙香の母であり、慎作の嫁である。物故者。

村上慎一郎 (むらかみ・しんいちろう) 現在の村上理化学研究所 (ほぼ薬局) 所長。昭和初期生まれ。ぼちぼち引退を考えている。常にやる気がない。遙香の甥。

村上 妙子 (むらかみ・たえこ) 彩香の母であり、慎一郎の嫁である。口癖は「あなたは、さっさと、婿をもらってお店継いじゃなさいよ」。

村上 彩香 (むらかみ・あやか) 慎一郎の長女。デスマーチで嫁ぎ遅れた情報技術者。誰かと素敵な恋をしたいと、常に理想の誰かを胸に宿している。なんと、遙香からは「お母さん」呼ばわりされた。まだ未婚なのに.....。バツゼロ子持ち.....。

樺島 健也 (かばしま・けんや) 村上理化学研究所 (という名のほぼ薬局) 所員。薬剤師免許等保有。好奇心旺盛。

(神奈川県立都筑丘高等学校の皆様)

対馬 さつき (つしま・さつき) 同高校、2年1組の学級委員長。何事にも動じず、真顔で笑いを取る、アタマの回転が早いタイプ。

冴木 まどか (さえき・まどか) 同高校、2年1組の転入生。オーストラリア、ブリスベン日本語学校からの帰国子女で、念力の元となる英単語を村上遙香にこっそり教えて、学校中が大騒ぎになる。

丹羽 裕一郎 (にわ・ゆういちろう) 同高校、2年1組のクラスメイト。趣味で歴史 (近・現代史) に詳しい。村上遙香ちゃんラブ (片思い)。

藤本 克人 (ふじもと・かつと) 同高校、2年1組の学級担任。担当科目は数学。

参考文献など

<参考文献>

東京朝日新聞縮刷版 昭和7年12月 復刻版／日本図書センター
(12月16日号外、12月16日夕刊、白木屋デパートの火災場面を引用)

イメージソング設定／ご協力いただいた皆様

<勝手に主題歌設定>

少女／村下孝蔵 (歌詞)

16才／村下孝蔵 (歌詞)

アルバム「林檎と檸檬」「村下孝蔵最高傑作選集」より

カラオケで「少女」を歌うと、息が切れます。ブレスするところがない、まるで海女さんのような感じで、腹筋をよく使います。もうダメだ、と思う事もしょっちゅう。酸欠になるのではないかと思うほど、「少女」という曲はキツイですね。

<ご協力いただいた皆様>

るばにるか、さん (ネットのお友達)

尼崎市立中央図書館

誰もいない地下室

そこは、誰もいない地下室。一見、ウイスキーの蒸留タンクとおぼしき古風な銅製の装置には、一枚の黄ばんだ紙が貼られていた。そこには、こう書かれていた。

内務省告示第八拾七號

時局柄、悪影響アリト認めラルルニ
手段ノ如何ヲ問ハズ
何人タリトモ当該装置ノ封緘ヲ開封セシメザルコト
亦当該装置ノ運轉ヲ停止セシメザルコト
封緘ヲ解キタル場合ノ安全ハ保證セズ
但シ已ムヲ得ザル事由アル場合ニ於テ内務大臣ノ許可ヲ
受ケタル時ハ此ノ限りニ非ズ

一、当該装置ノ所在地 神奈川県都筑郡田奈村大字恩田一六八番地

附則 此告示ハ昭和拾貳年七月壱日ヲ以テ施行ス

古風な薬局の意外な地下

横浜市青葉区青葉台——新興住宅地の一角に、コンクリート製の薬局とおぼしき、年代物の店舗がある。一見、蛙や象のマスコット人形が置いてあったり、栄養ドリンクの冷蔵ショーケースが、店の外からも見えるので、あ、やっぱり薬局なんだと、誰にでも思われやすい。

ただ、店の名前が一風変わっていた。そう！ 薬局とは世を忍ぶ仮の姿。その名も「村上理化学研究所」である。何だか、名前負けしているようだが、ここを研究所と思って、目をこらしてよく見れば、なるほど、どうやらここは研究所なのかも知れないのだ！

ある日の昼下がり。つなぎの制服を着た、まだ20歳代とおぼしき、関東電気保安協会職員が、軽ワゴンから降りてきた。元気はつらつ、非常にエンтроピーが高そうな青年である。

「こんにちはー、関東電気保安協会ですがー！」

「はい……？」

店の前を掃除していた白衣の老人男性は、うつろな目をしていた。元気な職員の呼びかけに対し、白衣の男性は、極めて低エンтроピーな声で応えた。

「あ、お店の方ですか、関東電気保安協会です！」

「……電気温水器は間に合ってますが」

「温水器じゃないです」

「今月は、ちゃんと払ってるし……」

「お、屋内配線の点検に伺いました！」

「何だ、最初からそう言いなよ。まあ、あがんなよ」

「失礼します！」

とぼとぼと歩く白衣の老人男性は、きびきびとした元気な彼を、レジの裏手にある在庫置き場へと案内した。いかめしい導管や、古めかしい配線があちこちに伸び、さながら、壁面に向かってツタが絡まっているように思えた。

「君、若いねえ……トシいくつ……？」

「今度二十歳になります！」

「あ、そう……道理で元気なはずだ……」

「まあ、元気だけは取り柄っすねえ」

「うん、うん、若いうちは、そう来なくては……」

「じゃ、じゃあ、これ、今から調べさせていただきますね」

すこぶる元気な彼は、カバンから測定器を取り出すと、そのからまったツタと向かい合った。しばしの間、それら配線群を感心したように眺め回していた。

「うあー、どこがどうなってんだろ」

「……」

「参考までにお訊きしたいのですが、この建物、いつから建ってるんですか？」

「確か、昭和十年ごろだと思うよ……」

「そ、そうなんですか！ うわああ……こういっちゃ何ですが、何もかもが年代物ですねえ！」

「……ああ、物心ついた時から建ってたから」

彼は古風な分電盤の蓋を観音びらきに開けると、舞い上がるほこりに思わずむせた。彼は、それから暫くは箱の中をきょろきょろしていたが、やがて探していた物が、その中には何も無いことに気づいた。

「済みませんが、ここの配線図とかは……」

「んなもなあ無い」

「な、ないんですか！」

「今まで見せてくれと、言われたこともないんだが……」

「これはもう……継ぎ足し継ぎ足しで、いったん図に書いてみないと、僕は、すぐにはわかりませんねえ」

「……だろうねえ」

「い、今までの定期点検では、どうされてたんです？」

「あ、点検？ そういやあ……毎年来てくれていた人は、もう定年を迎えたからねえ……クニへ帰ってるさ、たぶん今頃は……」

「は、はあ」

彼はレポート用紙を取り出すと、一本一本の配線をトレースし始めた。床にしゃがんでボールペンで配線を書き、立ち上がって測り、またしゃがんで書き……という作業を、かなりの回数繰り返していた。

「見ていて落ち着かないから、机を使いなさい」

「あ、これはどうも、済みません」

「かなり、かかりそうですか」

「そうですねえ、一般の店舗の配線とはちょっと違いますんで」

「そうだろうとも……なにせここは研究所なんだから」

「あの一、営業中まことに申し訳ないんですけど、今から五分間、全部の電気停めていただいてもよろしいでしょうか？」

「……」

白衣の中年男性は、困ったような顔をして、腕組みをしてしばらく考えていた。

「……ダメ……ですか？」

「……仕方がない、おやんなさい」

「済みません、助かります」

彼は、分電盤のブレーカーをバチバチと落としはじめた。数にして三、四十個はあっただろうか。周囲が次第に暗くなり、灯りは、彼が照らす懐中電灯だけとなった。

「あ、あれ？ お、おかしいな」

「なんだね」

「これ、何でしょう……これ、活線ですね」

「カッセン？ カッセンって何のことですか」

「この線、ほら、ここ、電氣流れてます」

「まさか……君が止めろというから、何もかも停めたはずじゃないのか……」

「どこへ流れているんでしょう」

「どこへって……君のほうかプロじゃないか、何を言ってるんだ……」

「ここだけ、ほら、主幹の配線に直接つながってます」

「じゃあ、その配線のもう片方は、どこへ向かっているというのかね」

「ここから、こう這って行って、ここで下に降りてます」

「下？」

「はい、どうやら、床下です」

陽に灼けた指が、床を指し示していた。

大発見、謎の装置現る！！

白衣の彼は、指差された場所を丹念に見回した。そこには、床収納用の取っ手があるだけだった。

「こいつじゃないのか」

「これ、何に使うんです？」

「ごく普通の床収納だけど、別に冷蔵庫がついている訳でもなし」

「.....お調べになった方がいいかも知れませんね」

「ここをかい？」

「はい、何か、漏電しては、火災の元ですからね」

「仕方がない」

白衣の彼は、中に入っていた乳白色のプラスチックケースの収納箱を表に出した。電力会社の彼も、重そうなそれを引っ張り上げることを手伝っていた。するとどうだろう。五十センチほど窪んだ床収納の中に、蝦茶色に塗られた鉄製のハッチが、その床面に現れた。

「なんだこれは」

「何なんでしょうねえ」

「.....開けてみるか」

「え、ええ.....」

扉の隙間の地下から、冷たい風が吹き上がってくるのを感じた。白衣の彼は、電力会社の彼に促されるように把手を握り、重そうな蝦茶色のハッチを開けた。そこにはセメント製の粗末な階段が地下へと続いていた。

「！」

「何てこった、階段じゃないか」

「僕、先へ行きます」

「待ちなさい。中に酸素があるかどうか分からない。ちょっとだけ待っていてくれ。計測機器を取ってくる。私が戻る間に、他のブレーカーのスイッチを、全部入れておいてくれないか」

「わかりました」

電力会社の若者が暫く待つと、白衣の彼は、奥の部屋から小型のガス・クロマトグラフィーを持ってきた。

「この針がもし左に振れるようなら、酸欠ということになるから、注意して歩きなさい」

「じゃあ、ちょっとお借りします」

懐中電灯を手にした電力会社の彼と、白衣の彼は、灯りの無い地下室へと歩みを進めた。階段の突き当たりには、古風な木製のドアが付いていた。空気は、洞窟のような湿気を帯び、冷たい。

「この扉、開けますね」

「針が振れたら、注意なさい」

扉の向こう側は、十畳ほどの広さがある地下室だった。そこには、何やら得体の知れない銅製の装置があった。ウイスキーの蒸留に使うにすれば、蒸留用の筒が上に向かって伸びていない。その装置は、供給された電力によって静かに唸りを上げていた。装置の銅板と銅板を止めるリベットにはべつとりと緑青が付き、半分錆びかかっていた。二人は息を呑んだ。何に使うものか分からない電動のそれが、微かに唸っていた。分電盤にあった謎の活線。その電力は間違いなく、目の前にある巨大で得体の知れない装置に供給されているものだった。

「酸素、大丈夫ですか」

「薄いけど、命に別状はないだろう」

「な、何なんでしょうね、これは……」

古風な電気機関車の一部分、といってもいい通風口だとか、上部に設けられた重そうなハッチだとか……二人はエッジに丸みを帯びた立方体のそれが、何の為にある物なのかがわからずにいた。

「これが何だかわかりますか、村上さん」

「さっぱり分からん。が、何か操作盤が付いている」

銅製の装置の右側面に、ランプと、数個の押釦がはめ込まれていた。

「『止停』とある」

「それって、右から左に読むんじゃないですか？」

「ああ、そうか。停止、運転、解放、閉止、非常とある」

「何を解放するんでしょうかねえ」

「……毒ガスでも解放されたら堪らん」

「まさか……あ、壁に灯のスイッチがありますよ、点けてみましょう」

「君は勇気があるなあ」

薄明るい裸電球に照らされたそれは、その全容を明らかにした。見れば見る程、何をする機械

なのかが分からない。しかしそれは、現代にはない重厚な存在感を以てそこで稼働しているのだった。ふと、白衣の彼が、傍らにある大学ノートを手に取り、埃をはたいた。彼は暫く、その塵埃に咽せた。

「人工冬眠装置、運転停止手順……理学博士、村上慎作……私の祖父の名前だ！」

「な、何です、その人工冬眠装置って一のはっ！」

「とにかく一旦上に上がろう！ どうやら我々は大変な物を発見したらしい！」

古風な大学ノートを持ち、彼らは大急ぎで階段を駆け上がった。―― 白衣の彼、村上慎一郎は、内線電話で彼のただ一人の助手を呼びだした。

「おはようございます博士。あれ、息切らしちゃって、どうしたんです？」

「床下に……ハアハア……大変な物を……ハアハア」

「何ですか、このノート……随分かび臭い……人工冬眠装置？」

「ハアハア……それが……何だか分からん装置が……ハアハア」

「床下に？ ですか？ 何ですか、このハッチ？」

「どうも、か、関東電気保安協会の……安齋です……いやー、びっくりしました」

「床下に、何があるんです？」

「樺島君も一度見るがいい……ハアハア……驚くから」

「何を今更、僕は何があったって驚きはしませんよ、ハハハ」

「いいから見て来給え……」

「ここから入るんですか？ へー、こんな所にハッチが付いているなんて……」

「……」

「……」

『何じゃこりゃあああああ』

地下から、絶叫があがった。

「……ほら」

「……誰だって驚きますよ」

助手の樺島が、ゼイゼイ息を切らして、階段を駆け上がって来た。

「博士、あ、あれは何ですか！ ど、どうして、あんなものが動いているんですか！」

「怒るなよ」

「怒っちゃいけません、驚いているんです、何で今まで秘密にしていたんですかっ！」

「秘密にするも何も、私も初めて見た……恐らく私の祖父の仕業だ……」

「お、おじいさま、ですか？」

「大学ノートに、ほら、祖父の名前が……」

「人工冬眠装置、運転停止手順……と、いうことはですよ、博士」

「何だ」

「あれがもし人工冬眠装置なるものだとしたら、中に人が入っているかも知れませんねえ」

「君ィ、脅かすなよ」

「この手順書が本物だとして、先ほどの装置の停止にもし手順が定められているのなら、その通りにした方がいいんじゃないんですか？」

「……」

彼らは、その古い大学ノートを読み漁った。電力会社の彼は、至急上司と来宅することを約束し、軽自動車職場へと帰って行った。

「何々？ 末孫ニ於テハ、係ル人命尊重ノ観点カラ、以下ノ手順ヲ遵守シ、安全ニ装置ヲ停止セシムル事ヲ望ム……先ヅ……」

「これ、右側の押し釦のことでしょうかねえ」

「最も左の……停止を押してから、解放せよと書いてある……」

「時代がかった文章で、何だか読みづらそうですねえ」

「……あだやおろそかに解放できんだろう……何が入っているのか、何が出て来るのか、皆目見当が付かんのだから」

「そうでしょうねえ博士……」

「把手ヲ九十度回轉シ、先端ヲ下ゲ……」

「人躰ハ臥床位置カラ座位置ヘト急戟ニ変化セシムル事勿レ……」

「樺島君！ 人体だ！ あの装置の中には、人体が入っているらしい！」

「本当ですねえ……確かに『人躰』とありますねえ……」

「知り合いの坊主に来てもらうか、それとも救急車か……」

「薄気味悪いですねえ」

「……ところで、何だ、この紙は？」

「ああ、それですか、装置の前に落ちていたから、拾って来たんです」

「何々？ 内務省令——内務省？ 今は総務省か？」

「えーっと、この装置を許可なく開けてはならないけど、やむを得ない時には、許可を得てから開けること——と、読めますねえ」

「あれを開けるのに、政府の許可がいるのか？」

「た、多分、そうなんじゃないですか？ 区役所に電話しましょうか？」

「区役所……」



横浜市青葉区役所の総務課に、一本の電話が入ったのは、それから間もなくのことだった。

「課長、青葉台の村上さんなんですけど」

「村上さんが、どうしたって？」

「自宅の地下に、正体不明の装置があるので、何とかして欲しいと」

「え？」

「ついては、昭和十二年の内務省令が貼り付けてあったので、見て欲しいと」

「……」

課長なる人物は、デスクの前で腕組みをして、考え事をしているようだった。

「まさかとは思いますが、ちょっと行って見て来てくれんか、あの人はあれでも博士だから、嘘はつかんとは思いますが……」

「関東電気保安協会の職員が偶然居合わせたそうで、発見したそうです、装置を……」

「それで、何で大事になっているんだ？」

「中に、人体が入っているらしいんです！！ これは緊急に！！」

「まさか、そんな事が……どうするべきか……」

各課を集めた緊急会議が行われたのは、それからすぐのことだった。

未来に向かって棄てられた少女

その日の夜の村上理化学研究所。何だか騒がしい。神奈川県職員、青葉区役所職員、神奈川県警、総務省、横浜市消防局、など。極めつけは、陸上自衛隊の毒ガス処理班だった。報道陣のカメラが村上家の周囲を取り囲み、決定的瞬間を逃すまいと必死だった。そこへ、何も知らずに、東京メトロ半蔵門線の半蔵門駅から、東急田園都市線の青葉台駅まで帰ってきた、情報技術者の村上彩香。

「な……なに？ この、騒ぎ……」

スーパーマーケットで買い物した袋をぱたりと落とし、群衆に駆け込む彩香。

「ちょっ！！ 道を開けてください、ここは私の家なんですってば、どいて！！」

「おやまあ、彩香、おかえり。それが大変なのよ……主人が変なモノを見つけちゃってね、いまみんなで地下にある謎の装置を開封するところなのよ……」

「もうっ！！ 何で先に電話で連絡しないのよー！！ まったくもう！！」

「だって、あなた、いつだって留守電でしょ？ 携帯！！ ささ、早く、作戦本部のテントに移動しなさい！！」

そうこうしているうちに、自衛隊の毒ガス処理班が、その「人工冬眠装置」つまり、コールドスリープ装置を無事に解放したらしい。

「ガス未検出、異状なしであります」

「ご苦労。それから、中の人体の様子はどうかね」

「少女とおぼしき人体1名発見。……それがまだ、睡眠している模様です」

「生きている……ふむ……神奈川県警さん、いかが致しますかね」

「内務省令には、危ないから装置に封印した。それがですね、彼女のどこがどのように危険なのか、私どもにも、さっぱり分らないのです。どうです、横浜市消防局さん？」

「村上さんの持っていた、黄ばんだ紙、内務省令ですよ。確か、時局柄が悪いので、悪影響を及ぼすので、封印した、というニュアンスが見て取れるんですよ。ただ、何が原因で、その装置に封じ込められたかは、私どもにも分かりません」

陸上自衛隊、神奈川県警、横浜市消防局の職員は、一同、ふーっと溜息をついて、それぞれ腕組みをして、考えあぐねていた。そこへ、コールドスリープした少女の経過観察をしていた横浜市消防局専属の医師が、慌てて室外へ飛び出して来た。

「作戦会議中のところ、お邪魔して済みません。患者のバイタルが回復し、装置から患者が降り

て来ました。名前を……確か、村上遙香と名乗ってから、脈を診ようとしたのですが、いきなり、念力を唱えたかと思うと、私の眼鏡は割れるし、やおら、壁に向かって浮くように叩き付けられまして……お母さんはどこ、といったニュアンスのことを、繰り返し述べています。以上です」

「念力！ お母さんがいないから、寂しがっているのか……」

「しかも、相当怒っている……」

「とはいえ、少女相手に重火器をぶっ放す訳にもいかない訳でして、自衛隊としても、なんともお答えのしようがないですね」

そこへ、村上彩香が現れた。

「皆様、お騒がせしています！！ 村上慎一郎の長女で、彩香といいます。どうぞよろしく願います」

「ああ、村上さんのお嬢さんね。いま、大変困っておるところなんです。その、装置の中に少女がいて、しかも生きていて、自分の事を村上遙香だ、って名乗っているんですよ。参りましたね、こりゃ」

「生身の女の子がいるんですか？ 私に行かせてください！！ 説得します！！」

「まあまあ、慌てなさんなって。一応、今は階段のドアはふさがっている状態です。ただ、これを念力で突破して来られると……」

遠くから、盾と警棒を持った巡査が、作戦本部に来た。

「階段のドア、念力によって爆破され、突破されました！！」

「……付近のマスコミを待避させろ。それに、野次馬もだ」

「了解しました。えー、各員、各員、店の前に集まるマスコミ野次馬を待避……」

「……あの一」

「何ですか、村上さん？」

「遙香という名の彼女、いや、父の叔母は、何で怒っているんですか？」

「どうやら、母性愛に飢えているようなのです。今回、お母さん代わりになる方は、店の奥さんでも無理なようでした……年齢的に」

「私、行きます。会って話をします。神奈川県警さん、盾と警棒を持って、2～3人で一緒に来てください。守っていただければ、きっと、何とか……」

「じゃあ、任せましたよ。あなただけが、この騒動を抑えられるかも知れません……」

「ま、任せるって言われても……」

村上彩香は厳しい眼差しに変わった。前面に機動隊員3名を配置し、徐々に歩み寄る作戦に出た。徐々に、薬局のドアににじり寄る。表はもう夕闇で真っ暗。煌々と灯る薬局の灯だけが頼

りだった。一体、どんな子なのだろう。私は、一体、どうアプローチ、つまり、仲直りすればいいのか分からない、という取り留めもない考えがぐるぐるしていた。薬局の正面玄関まで、距離は数メートル。全員、生唾を飲み込んだ。来る。念力とやらが来れば、吹き飛ばされるかも知れなかった。声をひそめて、彩香が言った。

「あ、あれが遙香ちゃん？」

「そうです、あの子です」

「何だか危険みたいですよ」

「うーん、私には、そうは思えないんだけど」

ゆっくりと薬局のドアを開ける。静まりかえった店内の床に、少女が、村上遙香なる人物が、制服姿で床にぺちゃりと座っていた。女の子座りというのだろうか。意を決して、彩香が機動隊員の肩越しに顔を出した。そして、呼びかけた。

「遙香ちゃん？ わたし、村上彩香。どうぞよろしくね」

しゃがんだ彩香の呼びかけにも応えず、今度は遙香がさめざめと泣き始めた。何だか、寂しいよう、とかいう独り言をつぶやいていた。それを聴いた彩香は、機動隊員に告げた。

「機動隊さん、ここは、私に任せて！！ 後ろで援護しててくださいね」と、耳打ちをした。はい、わかりました、という具合に、隊列は後方へ下がる。そして、手を差し伸べた。

「遙香……ちゃん？」

「うええええー、お母さあああん！！ ひっく、ひっく」

（え？ お、お母さん？ ちょっと待って、私ってば独身！！）

「お、お母さんが来たから、もう大丈夫よ！！ ほら、泣かない泣かない。女の子でしょ！！」

「はい〜」

「はい、ガムあげる。これで、仲直りしよう。ねっ！！」

「あ……」

「なあに？」

「ありがとう……おひしいー」

「まあ、良かった。じゃあ、お母さん（？）と一緒に、お風呂入ろうか！！」

「はい、であります！！」

「とことん戦時中の子ね……」

「何かおっしやいましたか、お母さま」

「ぶるるる、何でもなしの。ひとりごと」

店の隅で、ガクガクブルブル震える慎一郎と、樺島に向かってまずは腕で大きく丸のサイン。慎一郎と樺島の緊張が解けた。そうして、次に、屋外へいた関係者の皆様に向かって、腕で大きく丸のサイン。事件が解決した瞬間だった。皆が溜飲を下げ、ほっとした様子で撤収準備に入った。群がるマスコミを、警官隊が退去させた上で、やがて、いつもの静寂が訪れた。

遙香をお風呂に入れ、客用の布団で寝かせ、やっと落ち着いたところで、台所でワインをがぶ飲みしている彩香がいた。そして、黙ってハイボールを酌み交わす慎一郎と樺島。がつつり脚を組んで、頬杖をつき、フテ腐れている彩香だった。

「ちょっとおおお、あんたたちー」

「は、はいいいー」

ダンッ！！

「アタシが何で婿ももらわずにいきなり母親なのよー！！ だいたい、あんなもの発掘するほうが、悪いに決まってんでしょおおお？ ねえ、聞いているの！？」

「は、はい……」

「ざけんじゃないわよ！！ バツゼロ子持ちって、会社にどう説明すればいいのよ。ったくさー、余計なことしやがって、このクソツタレ親父が！！ 恥を知れ、恥を。誰が面倒見るってーのよ、毎晩毎晩、こんなに残業してるのに。上司にどう申し上げなければなんないのー、もし、隠し子だと思われたら、給湯室で女どもに、何言われるかわかってんのかゴルラァ！！」

「ひ、ひいいい……」

「どのみち、戸籍とか、住民票とか、学校とか、全部アタシでしょ？ 明日1日だけ、有給取ろうっかなー。マネージャには悪いケド、全部おっさんらの所為よ。こらそこ！！ 酔いつぶれてんじゃないわよ！！ 先に寝る！！ おやすみっ！！」

村上家の夜は更ける……。

遙香のイマドキ・ドキドキデビュー！

区役所の手続きは、あの親父どもに任せ、遙香は彩香と一緒に、とある神奈川県立高校……神奈川県立都筑丘（つづきがおか）高等学校の門をくぐった。携帯には、こんな着信メールがあった。

『朝刊を見た。一週間有給で休んでよろしい。 課長』

昭和初期の神奈川県都筑郡には、高等学校がなかった。コールドスリープ装置には、東京府本所区（現在の墨田区錦糸町界限）にあった高等女学校（現在の女子高）の成績証明もあったが、現在とは科目がことごとく違う上に、評点は「甲乙丙丁」の4段階評価である。これには、校長以下、職員全員がアタマを抱えてしまった。

「校長、こりゃダメです、その女学校、古すぎて、ウィキペディアにも載っていません！！」

「どうします、校長？」

「学力試験を行う。編入学試験……えー、村上さんのお母さん」

「あの一、お母さんじゃなく、せめてお姉さん……」

「こーんな感じの編入学試験を受けてもらうので、その結果次第で、何学年かが決まります。よく勉強しておくように」

「はあ〜い」

「こら、遙香ちゃん、もっとヤル気を出して！」

「だって、勉強キライだもん！」

「はっはっは。正直なお子さんだ。勉強しておくんだぞー」

「はあい」

「だから、アタシこの子の母親じゃないんですってば！」

……高等学校を後にする。東急バスを待つ2人。

「案外、不便なところにあるのよねえ……」

「遙香、喫茶店行きたいなあ……お母さん」

「だからああっ、アタシはお母さんじゃなくて、お姉さん！」

「とにかく、ラムネか何かが欲しいです」

「ラムネ……レモネードだったらあるかな」

「行こう、行こう！？」

「まあ、そうね、お話し合いにも疲れたでしょうし、どこか駅前の喫茶店でも……」

銀色の東急バスが来た。

「お母さん……じゃなかった、お姉さん、このバスは何銭で乗れるのですか？」

「銭……じゃなくて、いまは210円よ」

「210円もするのですかー！！　まるで、自動車が一台買えちゃいますう」

「それは昔のおはなし。あなたが眠ってる間に、世の中どんどん進んでいるんだから」

「ほえ～」

駅前バスが着くと、遙香が振り向いてこう言った。

「何だか、210円も、せこくなりましたねえ、お姉さん」

「そうよ、いまは210円でジュース1本だけ買えて、お釣りが出るくらいかな」

「はう～」

「さて、喫茶店でゆっくりレモネードでも飲みますか」

「はい！」

うきうき気分で喫茶店に向かうふたり。特に遙香は、ほぼ半世紀以上ぶりの炭酸飲料だ。うれしくないはずがない。窓際の席に陣取ると、遙香は不思議そうに建物や最新式の自動車、そして、街行く人たちのファッションを、驚き半分で見ていた。

「遙香ちゃん、もし高校に合格したら、こんな制服が着られるのよー」

「わ、カワイイ！！　わたし、これ着たい着たい～！！」

「未来にはね、きれいなもの、カワイイものがいっぱいあるんだから～」

「ご注文はお決まりですか？」

「じゃあ、レモネードふたつ」

「かしこまりました」

「わー、お母さん、レモネードです！！　わたし、喫茶店はじめてなんですう」

「……って、もうお母さんって呼ぶのやめて。おねえさん。おねえさんね」

「……わ、わかりました、おねえさん」

世間話に花が咲いている間に、猛烈酸っぱそうなドリンクがグラスに注がれてやって来た。

「レモネードです」

「はい」

「わああ！！　いただきまあす」

そもそも半世紀ぶりの刺激……なはずだが、遙香は一気に飲み干そうとしていた。

「うわああ……あんなに一気に飲んじゃって……」

「げふっ」

ラムネの味を想像していたのか、予想外の酸っぱさに遙香はむせた。刹那、上から下がっている照明の電球が、何の前触れもなく割れた。

「きゃあ！！」

「だ、大丈夫ですか、お客様！！ お怪我は！？」

「ちょっと、何が何だか……」

「誠に申し訳ありません！！ すぐに清掃いたしますっ！！」

「これはこれはお客様、大変失礼いたしました」

(……まさか、危険だって言ってた彼女の念力って、これのこと！？)

おかげでガラスの中身は、割れた電球の欠片でいっぱい。

「お代金は頂戴しませんので、なにとぞご容赦を……」

「当たり前です！！ こんな危ない喫茶店、私、初めてよ！！ もう、気をつけなさい！！」

「あ、これ、わずかばかりですが、クリーニング代です。よろしければお納めを……」

「じゃあ、使わせてもらうわ」

……と、表向き、店の所為にしてちょっと高飛車に言ってみたのだが、この騒動、実は遙香の念力の仕業だったのだ。気を取り直して、ショッピングセンターを歩いてみたりする。

「これはもう、着替えが必要ね」

「はい、であります！！ おねえさま」

婦人服のディスカウントストアに来た彩香たち。遙香は、その有り余る物量、品目の多さに目を丸くして驚いた。

「おねえさま、お洋服が一杯であります～！！」

「そうね……こんなニットワンピースの……こんなコーデなんかどうかしら」

「さすがは未来です、こんなに可愛いのが着た事ありません」

「上はこのキャミソールで、下は、こういうボーイッシュなパンツも。はい、遙香ちゃん」

「うわー、外人さんが履きそうな長ズボンです」

「どれにする？」

「では、彩香おねえさんオススメの、これとこれにします！！」

「分かったわ。ちょっとアタシのお洋服も見させてね」

気が合ったのか、二人とも白系統のワンピースを試着していた。会計を済ませる前に、彩香がこう言った。

「じゃあ、アタシがカチューシャ買うから、遙香ちゃんは、シュシュにして、こんな感じ。どう？」

「うわ、もう、幸せすぎてアタマが真っ白ですうう」

「じゃあ、店員さん、これ、サービスで付けて」

「か、かしこまりました」

レモネードでべたべたになった洋服を手提げ袋に入れると、店を後にした。すっかりさっぱりしたふたり。

「お洋服、ありがとうございます、おねえさま」

「今日は、青葉台だけにして、渋谷は慣れてから行きましょうか、ね、遙香ちゃん」

「『渋谷』は慣れています、おねえさま」

「いや、昔の渋谷じゃなくて、今の渋谷は、保護者なしでは遙香ちゃんが危険よ」

「そうなんですか？」

「た、たぶん、あまりの発展振りに、目を回すと思うから、未来は徐々に慣れて行きましょう」

「ふうーん」

薬局……もとい、村上理化学研究所に着いたふたり。

「ただいまー」

「ああ、お帰り」

「あらまあ、あんたたち、新しい洋服で！！」

「まあね、ちょっと訳アリで……」

「この子が、また念力でも唱えたのか？」

「まあ、そんなところ。ふー」

「ふー、です」

「真似しなくていいの」

「あはっ」

隠された昭和史(1)

翌朝、村上遙香が起きてきた。村上彩香「お姉さま」と一緒に。（「お母様と言ったらひどいわよ」オーラを発しているから）。遙香は、新聞を抱えて降りて来た。あのコールドスリープ装置から持ち込んだものだ。

「おはようございます」

「あ、おはよう、遙香ちゃん、ご飯出来てるわよー」

「何だね、その新聞紙は……」

「はあ、父が、未来の方に手渡せ、と仰ったので、持って来ました」

「何々、東京朝日新聞、16日の号外と、翌17日の新聞。これは年代物だ」

「彩香、あなたご飯は？」

「んあー？ トーストとコーヒーでいい」

「はいはい」

「何々、白木屋呉服店火災……だと……？」

（東京朝日新聞 昭和7年12月16日 号外裏面）

四階から発火 死者多数に上る 猛火に包まるる白木屋 灼熱地獄の惨！

十六日午前九時半頃日本橋区通り一丁目白木屋呉服店四階から発火、直ちに上階に延焼、更に日本橋通りに面する四階、五階の売り場を焼き尽くし更に火の手は六階に向かって猛烈に加わりつつある、同店は午前九時店を開き歳末の事とて開門と同時に殺到しており数百名の男女子供のお客は荒れ狂う火の手に追われて屋上へ屋上へと逃れ中には数十尺の窓から街上めがけて飛び降りる者もあり、煙に巻かれて目下のところ死傷者数知れず、店員警察署員の手で猛火の中を救出されているが繁華街としての日本橋大通りは全くの修羅場と化しつつある。

Xマスの飾りから発火 赤ん坊忽ちに窒息

四階の発火場所おもちゃ部の女性店員松崎あい（二〇）谷田寛子（一九）の両名は交々語る『九時二十分と思われる頃玩具部に造ってあったとても大きなクリスマスデコレーションに漏電で発火して、つるしてあったセルロイドとそこに置いてあったセルロイドの玩具に燃え移ったために非常に火勢が強く見る間に店内に燃え広がったものと思われます。私達が救護室に助けだされた時は男の人は一人だけ残ってまだ消し止めようと努めていましたが赤ん坊を抱いた女のお客さんが丁度玩具部に来ていたが、あとからの話によるとその赤ん坊はそのまま窒息して死んだらしゅう御座います。何にしてもお店が可哀想です』

（以下略）

「ひ、酷い……」

「で、この号外と、新聞はどうしてここに？ お父さんが持たせたのか？ 遙香ちゃん」

「はい、未来に着いたら、近い人たちに見せるようにと言われました」

「で、この記事と、どう関係があるんだ？」

「はい、わたしは、父に駄々をこねて、このように呪文を唱えてしまったのです」

遙香はメモ帳に「ぱふ」とだけ書くと、慎一郎たちに見せた。覗き込む慎一郎たち。これは一体何なんだ、というような顔を互いに見交わす。

「この念力は、小さい物を破裂させる効き目があって、わたし、十一歳でしたから、ツリーの前でこれを唱えてしまったのです。クリスマスツリーは、電球が一杯並んで付いているものですから、次々に破裂して火花を起こして……気がついたら、父に抱えられて、非常階段を降りていったという案配です……たくさんの人たちに……迷惑をかけました」

「それから、どうなったの、遙香ちゃん？」

「目撃証言から、わたしがやったことが内務省に分かってしまい、わたしは内務省の手によって、誰にも内緒で、人工冬眠装置に乗せられて、そして、この時代まで眠りにつかされていたというわけです」

「……」

泣き出しそうな遙香に向かって、優しく声をかける彩香。

「まあ、済んだ事じゃない。気にしないでいいよ。もう忘れなさい、よしよし」

「でも、でも、おねえさま……」

「献花なら、後で日本橋まで行きましょう。お花を供えましょう」

「でも、そんなんじゃ、わたし……」

「もう何年前の過去だろうか。あれから空襲があって、敗戦があって、復興して……」

「えー！！ 日本軍が負けたのですかー？」

「おや、知らなかったのか、遙香ちゃん。意外だなあ……」

「事実を隠蔽していたという訳ね。わかったわ。私と遙香ちゃんは、これから都心へ出ます。行って、お花を供えに行くことにします」

「じゃあ、行っておいで。気をつけてな」

「そ……それが、す……少しでも、罪滅ぼしになるのなら、その人たちの分も、お花を手向けたいと思います」

「偉い、遙香ちゃん！！ 小さいのに感心ね」

隠された昭和史(2)

東急田園都市線青葉台駅から、急行押上行きに乗って、青山一丁目で東京メトロ銀座線に乗り換えて、日本橋駅へ。かつての白木屋百貨店は跡形もなく壊され、代わりにコレド（COREDO）日本橋というファッションビルになっている。駅からの直通通路を通過して、1階へ出る。そして、表へ出た。

交差点の、建物ではなく、ガードレールに花をたむけ、線香の束に火を点けて、黙って拝んでいる彩香と遙香。傍目には、一見、奇異な行動に見える。しかし、これも彼女なりの禊ぎの一種なのかも知れなかった。数十年前に亡くなった皆さん、どうもごめんなさい。そう祈っているのかも知れなかった。

「さ、遙香ちゃん、もういいでしょう。禊ぎは済んだわね」

「は、はい……です」

「面影があるとすれば、首都高の下にある、日本橋ぐらいかもね。行ってみる？」

「本当に……何もかもが建て変わってしまって、変わらないのは、あの橋ぐらいです」

日本橋は、ファッションビルから見える距離にあった。何もかもが建て変わってしまった今、面影を残しているのは、かろうじて、この橋だけだった。

「おねえさま」

「なあに？」

「こうして、何もかもが移ろい、そして、変わってしまったのですね」

「……」

「わたし一人だけ、若いままで生き残って、今頃みんなどうしているのやら」

「もう、陰気にならない、ならない。過ぎてしまったことよ。むしろ、爆撃で亡くならなかっただけ、歳を取らなかつただけ、運がいいと思いなさい」

「そうだといいんですが……」

「それにしても遙香ちゃん、立派に供養ができました。偉い、偉い」

「この川……まるで地下に埋もれたどぶ川みたいですよ」

「それもそうね……じゃあ、お食事して帰りましょうか」

「ええ、そうしますおねえさま。なんか、ここにいても、センチメンタルになるだけですし」

「よし、供養は終わり！！ 気晴らしするわよ～」

「はいです、おねえさま」

「あのビルのスープ屋さん、ちょっと変わってて、具たくさんなのよ」

「び、ビーフシチューとかもあるんですか？」

「もちろん。他に、いろんなスープだってあるわよ」

「うわあ……じゃあ、行きましょ、行きましょ！！」

地下一階のスープ屋さんで「ボルシチ」を食べる、彩香と遙香。

「お、おねえさま、お芋がほくほくしてますう」

「そうね、ほくほくね」

「うわ！！ でっかいお肉！！」

「あら、そんなに珍しいの？」

「もちろんですとも、おねえさま！！」

「じゃあ、これ食べたら帰りましょうか」

「そうしましょう」

帰路に着く彩香と遙香。やがて、家で待ち受けていたのは、出来上がった「県立都筑丘高等学校」の女子制服だった。

「ただいまー」「ただいまです」

「あら、あなたたち、丁度良かった。仕立て上がった制服よ。何なら、ここで着てみて頂戴」

「はい」

「えーっと、あれ脱がせてこれ着せて……リボンはこんな感じか」

「おねえさま、着せ替え上手です」

「褒めても何にも出ないわよ……はい、姿見の鏡に映して見る！！」

「う……うひゃー。遙香、恥ずかしいです。こんな丈の短いスカート」

「大丈夫大丈夫。今ではこれが標準みたいなものだから、慣れよ、慣れ」

「2-1の襟章と、学校の校章をつける。これで完璧」

昭和初期にはあり得ない服装の制服姿になった遙香は、次第に、タータンチェックのスカートを振り振りさせながら、姿見の向こう側で、きゃっきゃ、きゃっきゃと、嬉しそうに跳ね回るのがあった。

「ええっと……」

「どうしたんですか、おねえさま」

「えーっと、携帯電話に防犯ブザー、かばんに、教科書とノート。ハンカチと……」

「えー。教科書も入れるんですかあ」

「当たり前じゃない！！ 遊びに行くんじゃないの。高校生なんだから」

彩香は苦笑した。そこへ、家のインターフォンが鳴った。

学校へ行く前に

「はい、どちら様ですかー」

「あ、あの一、わたし、県立都筑丘高等学校の生徒で、学級委員をしている、対馬さつきと申します。あの一、遙香ちゃんは……」

「どうぞ、上がって頂戴」

「失礼します」

対馬さつき。大人になったら、局アナにでもなりそうな予感がする女の子。しっかり者で、学級委員を務めている。放課後、寄り道をして、この薬局……もとい「村上理化学研究所」を訪れたものだった。

「あ、こんばんは。初めまして。対馬さつきです」

「こんばんは（カ一杯）姉の、村上彩香です」

「こんばんは……村上遙香です、どうぞよろしく」

「まあまあ、お茶は切らしてるけど、鉄分飲料ならあるわよ、冷えてるからね」

「あ、ありがとうございます」

「で、用事って何？」

「いえ、特段何もないんですが、彼女、友達いないだろうと思って」

「わざわざ済みません」

「遙香ちゃん、わたし、対馬さつき。よろしくね」

「はい、よろしくです」

「さつきちゃんね、新聞でも見たと思うんだけど、この子、見た目十六歳だけど、本当のところ、実はすごいお婆さん年齢なの。大正十年生まれ」

「えー！！」

「だから、来年、三年生になったら、みんなでお祝いをしてあげてね」

「な、なんですとー！？」

「びっくりさせてごめんね。この子、コールドスリーパーなの。人工冬眠装置で、戦前から寝かしつけられているから、今のこと、あまり詳しくないのかも知れなくて……友達になってもらえて助かるわ」

「いやあ……様子を見に来て本当に良かったです、はい」

「おねえさま、わたしは十六歳ですう！！」

「ほらね。でも、注意しておいて欲しい点がいくつかあって、英語の授業は、見学にして欲しいの。あるいは、黙読とかね」

「と、いいますと？」

「ジャーン。ここに風船があります。今から村上遙香が『ぱふ』と唱えます。見ていてね。はい、遙香ちゃん、念力をどうぞー」

「ば、ぱふ！！」

パーン！！ 風船は見事に対馬さつきの前で破裂した。

「うーわ。村上さん、これが彼女の特殊能力、念力というやつですか」

「まあ、そんなところね。あと、英語の出てる歌も要注意かな」

「はい。えー、英語と英語の出てる歌は禁句……っと。メモメモ」

「あ、鉄分飲料、冷めないうちにどうぞ召し上がれ」

「いただきます」

「ほら、なにせ、昭和十二年からつい最近までコールドスリープしていたから、時代感覚がちょっと違うみたいね。遙香ちゃん、おなじみのあの台詞をどうぞ！！」

「兵隊さんよ有り難う！ 欲しがりません勝つまでは！ 撃ちてし止まむ！ パーマネントはやめましょう！ ……って、何言わせるんですかあ」

「ぶっ、はっはっはっは……は一、おかしい」

「だから、ちょっと時代錯誤感があるのよねー」

「なるほどー」

「そういうわけで、クラスみんなには、ここは平成だ！！ って思わせるよう、努力してもらわなきゃいけないのよ……」

「一から平成を叩き込むのは、非常に大変だとは思いますが……」

「ほえ？」

「ほら、本人はこれだから……って、そうなの。だから、この子の将来は、対馬さんたち、みんなにかかっているの」

「はい、わかりました。肝に銘じておきます」

「じゃあ、明日からよろしくね！！ わたしも遙香と一緒に、父兄代表として行きます」

「あ、あの……さつきちゃん、よ、よろしくね」

「遙香ちゃん、そんなに堅くならないならぬ。友達でいましょうね」

「はい、でありますっ！！」

「まったく……挨拶が、堅い堅い……」

「そうかな……えへへ」

「じゃあ、お邪魔しましたー」

「さつきちゃん、ありがとうね！！」

「わたし、明日行くよ！！」

空になった鉄分飲料のビンが、畳の上に置いてある。明日から高校生だ。どうなる遙香。どうする遙香。そして、県立都筑丘高等学校で、なにとぞ怪我人が出ませんように……。

高校初日！

都筑丘高校の職員室に向かう、対馬さつき、冴木まどか、そして村上遙香。対馬さつきが、昇降口を上がって上履きに履き替えた。そして、二人の転編入生を呼んだ。

「冴木さーん、村上さーん、こっちこっち！」

「おはよう、さつきちゃん！」

「さつきちゃん、この子誰？」

「むう、あなたこそ誰よー？」

「カチン！ むむー！」

そして、向かい合わせになり、遙香とまどかがお互いがお互いの頬を引っ張り……。

「しょんなこと言ふのは、こによクチかー」

「しよれ、しよのまま、返しゅー」

「はいはい、二人とも仲良し仲良し。グッと画期的な顔になりましたよっと……早く来ないと行っちゃうよー」

二人「はーい」

きょろきょろと、下駄箱の辺りを見回す遙香とまどか。どうやら大きな下駄箱で、どこに自分の名前が書いてあるのか、すぐには分からない様子だった。

「えー、さつきちゃん、わたしの下駄箱どこー？」

「名前が書いてあるでしょー」

「あ、本当だ、村上遙香……」

「おや、遙香ちゃんの隣ね、わたし」

「二人とも、早くしないと、本当に置いて行くわよー」

二人「はあーい」

「真似すんなっつーの！」

「いべべべ！ まにえじゃないもん！」

「さてと、職員室にいこう、二人とも」

対馬さつきが先導役になって、村上遙香、冴木まどかの両名が、職員室に向かっているところ。

「あ、さつきちゃん、遙香ちゃん、まどかちゃん、おはよう」

職員室前で、村上彩香がスタンバイしていた。どうやら、父兄代表ということらしい。

「あ、お姉さま！」

「どうも、おはようございます、冴木まどかです」

「はい、みんな、おはようー」

「あの一、どうして村上さんがここへ……」

「冴木さんのご両親、お休みが取れなくて、代わりにまとめて面倒みちゃおうかな、と思ったわけなのです。どうぞよろしくね！」

三人「はい」

「じゃあ、入りましょうか」

職員室のドアを開けると、そこに、HR担任の藤本克人が座っていた。

「失礼しまーす」

「やあ、おはよう。君たちが転入生だね。数学科でHR担任の藤本です。よろしく！」

「冴木まどかです」「村上遙香です」「付き添いの、村上彩香です」

「じゃあ、HRで自己紹介してもらうんで、もう少し待って、上へ上がろうか。冴木さんに村上さん、気持ちの準備はOKかい？」

「はい……ちょっと自信ないです」

「いいえ、わたしは全然自信OKです！」

「さすがは帰国子女、自信に満ちている！ 日本語ちょっと変だけど！」

三階のホームルーム。二年一組の案内板が見える。みんなが揃っているようだった。嫌が上でも緊張する場面。扉が開いて、クラスの生徒たちが居住まいを正す。そして、日直の号令が発せられた。

「起立、礼、着席 おはようございます」

「はい、お前ら、おはよう！ 今日、帰国子女の転入生、新聞で見た編入生を紹介する。左側から、冴木まどか、村上遙香、そして、遙香ちゃんのお姉さんだ、拍手」

パチパチパチパチ……。

みんなの視線と拍手を浴びて、あわあわ緊張する遙香。それとは対照的に、落ち着き払ったまどか。

◇ ◇ ◇

自己紹介が始まった。まずは、まどかから。

「みなさん、オーストラリア、ブリスベン日本語学校から編入して来ました、冴木まどかです！ どうぞよろしくね！」……軽くぺこりとアタマを下げて、挨拶終了。

そして、問題の遙香……。

「あ、あの一、みなさん、おはようございます。あの一、えっと一、昭和十二年の東京府本所区錦糸町から来ました、コールドスリーパーの、村上遙香です！ よろしくお願ひします」

教室は最初、静寂を保っていたが……次第に、教室中がどよどよと私語に包まれていった。

「おい、東京府ってなんだよ」「コールドスリーパー？」「昭和十二年って！」「戦前かよー」「マジかよー」「コールドスリーパーって、何か、SFの本で見たことがある……」「ま、まさかー」「信じらんない」……見かねた藤本先生が声をかけた。

「おい、お前ら、静まれ、静まれ！ 大事な話がある。二度とは言わないのでよくオレの言うこ

とを聞くように！」

教室は藤本先生の指示通り、静寂を取り戻した。

「ニュース報道でも、みんな分かっている通り、戦前の内務省が危険と判断して、コールドスリープさせられた彼女だ。おとなしくしている分には命に別状はないが、もしいじめると、命の危険があるからそう思え。念力を使うことを除けば、九十九%普通の女子高生だ。どうか、仲良くしてやってくれ。以上だ」

◇ ◇ ◇

一限前の短い休み時間……。教室はざわめいている。対馬さつき、望月まどかが遙香と喋っていたが、やがて、男子のボス格たち三名が、村上遙香を取り囲んだ。

「村上遙香って一のか、お前」

「こいつ、あそこ腐ってるんじゃないか？」

「婆さんのくせに、生意気な！」

「むっ！」

ボスが、村上遙香のアゴを右手でつかむと、こう言い放った。

「てめえ、生意気だ！ オラ、念力とやらを見せてもらおうじゃねえか！」

「ちょっと！ 遙香ちゃんに何すんのさ！」

「あんたたち、乱暴よ！」

「うるせえ！ 村上遙香、顔を貸してもらおうぜ！」

「きゃあ」

村上遙香の腕を強引に取ったボス。だが、次の瞬間……。

「パンツいっちょおおおー！」

指をさしながら、思いっきり遙香が叫ぶと、ボスとその取り巻き合計三名の詰襟の制服やTシャツなどなどが、千々に裂けて飛んでいった。残されたのは、文字通りパンツ一丁のあられもない情けない姿。

「ぎゃあああ」「うおおお、何じゃこりゃー」「オレ、本当にパンツ一丁……」

遙香は、どうだ参ったか、という顔をして座席に戻った。

「このアマー！ 何しやがる！」「ふざけてんじゃないぞ！」「制服弁償しろー！」

次いで遙香は、彼らを指さしながら、また念力を声高らかに唱えた。

「ノックアウト！」

すると、彼らは宙吊りになり、見えない拳で三人はボコボコにされてゆくのだった。

「あ痛っ」「痛てえ」「ぐほっ」

とどめに、急所を狙う呪文を唱えた。

「ちーん！」

彼らは、半裸のまま、股間を押さえた状態で、床にうずくまっていた。

「えっへん！」

「参りましたー」ボスが懇願する。

「済みませんでしたー」

「もう二度としませんー」取り巻きも懇願する。

そこへ、帰国子女の冴木まどかが、遙香に耳打ちする。

「Get Out Of Here! と唱えると、多分イイよ、遙香！」

「う、うん！ ゲット・アウト・オブ・ヒアー！」

するとどうだろう。ボスたちだけが、ベランダの窓ガラスをぶち破り、校舎の外へ叩き出されてしまった。ちなみに、ここは三階……。重力加速度を伴いながら、グラウンドに落下する三人組……。

「遙香ちゃん、やるう！」

「えっへん！」

「YouはShockだよ！」

「何だそりゃ……」

国語の授業が始まる前に、先生がみんなに尋ねた。

「おい、黒田、黒崎、黒沼はどうした？」

「村上さんの逆鱗に触れて、呪文でグラウンドに叩きだされましたー」

「ハルカのパワーで、ブラックスリーはノックアウトされましたよティーチャー！」

「あ、そう。じゃあ、授業を始めるぞー」

(未定)

(未定)

遙香の大冒険！

多摩川を渡った銀色の田園都市線が、車体をねじ込むようにして、玉川通り、用賀の地下トンネルに吸い込まれていく頃、車内では、

(未定)

(未定)

(未定)

遙香よ静かに眠れ

ご愛読ありがとうございます！！

2010/08/31 91ダウンロード、753PV、ありがとうございます。

作者です。まだ序章だというのに、たくさんの方にDLしていただき、ページビューも、名が知れていない割には高水準で推移しています。これからもどうぞよろしく願いいたします。ようやく都筑丘高校の生徒名簿が出来ました。ここまで設定しないと、落ち着かない、というのが作者の性分でありまして、夜を徹して作り上げた割には、さて、誰を学級委員にするか、迷っています。女の子の名前を命名するときには、イマドキの名前の方がよかろうかと、某少女誌のプレゼント当選ページをランダムに、苗字に似合いそうなやつを、えいっ！！ とつけました。作者の好みもあるかも知れません。では。

2010/09/19 152ダウンロード、973PV、ありがとうございます。

作者です。とりあえず、執筆日誌にも別途記載の通りなのですが、昨日は、新聞の縮刷版を求めて、尼崎市立中央図書館まで出張りました。自転車で……。足にマメができて、つぶれて痛いっす。横浜市都筑地区に在住のネット関係者の方に深謝。地元情報を送っていただきました。大阪から、横浜を想像するのは、非常に難しいものですが、一度は田園都市線沿線に住んでいたこともあり、まあまるで知らない街を書くより容易いと言え、容易いのですが。

2010/10/01 209ダウンロード、1213PV、ありがとうございます。

作者です。白木屋百貨店の新聞記事をそのまま載せると読みづらいので、現代文に書き下しています。それにしても、見た目16歳の、89歳の女の子って、どんな感じなんですかね。そこが不思議ちゃんならではの、今までどこの小説にもなかった設定でございますよ。ええ。これからは楽しみですね。ではでは。

2010/11/13 351ダウンロード、1576PV、ありがとうございます。

作者です。結局、講談社ラノベ文庫編集部、新人賞に応募することに決めました。続編は、一太郎でもりもり書いています。学園ものを同時並行的に書くのは、いささか混乱して難しいのですが、頑張ります。とはいえ、家事雑事に追われて、ちーっとも進行していないのが現実です。ようやく、何とか呪文の方法を編み出しました。もし、選に漏れたら、ここで全面公開します。

2011/01/24 463ダウンロード、1940PV、ありがとうございます。

作者です。すっかり放置していました。紅葉野日記を先にやっつけてしまわなければならないのと、呪文の設定を忘れたため、遅れが生じています。

2011/01/27 ご愛読いただき、ありがとうございます。

作者です。なかなか静謐な時間帯が取れなくて、午前1時から、とりあえず午前3時（現在）まで起きて続きを考えています。

2011/05/24 ご愛読いただき、ありがとうございます。

作者です。結局ラノベ新人賞は「紅葉野日記」を出しました。どうなることやら……。それはさておき、英単語の呪文です。たくさん考えてはいるのですが、語感がかっこいい呪文になりそうな英単語ってなかなかないですね。あ、のらくろレコードは実際にあったものです。家にはありませんが……。のらくろは、当時の「大日本雄弁会講談社」から出版されていたマンガです。田河水泡先生と言えば分かりますかね。なぜ筆名を、田河水泡にしたかということ、本名が高見沢さんなので、た、かわ、みず、あわで、たかみざわ。ユーモアのセンスがありますね。

2011/07/09 かなーり遅れております。

作者です。ここが一番人気なのは知っていますが、その……呪文の語彙が足りなくてですね、体育祭で「ダッシュ！」と唱えればものすごい速さで走ることが出来るとか、「ブレーキ」という呪文で、自分が止まる効果もあるのですが。

2011/08/01 こんにちは！ 書けません！ 限界です！

ひとつは、所持金が7円しかない、ということと、たばこをやめているので、アドレナリンが出て来ない、というのもあります。この先どうすっかなあ……。

2011/09/14 また限界を迎えました！ 呪文体系をどうする？

まいど、作者です。呪文は作者が独自に体系を打ち立てないといけないので、さまざまな本を読んで、傾向をつかみ、独自の呪文を、時間がかかっても生み出そう、そう思っています。

2011/10/02 限界突破のために、呪文を念力に変えました

どうもです。腹ぺこ作者です。そのまま遙香が武力行使したら、帝都大戦における加藤になってしまうので、乙女チックなところが出せたらいいなあと思います。

2011/10/03 ね、ねむいー。

どうもです。午前1時です。拙作リップスのことを考えていたら、こっちも気になり出して、さて、はるかやみんなにとって敵は何か。とか、平成から更に先にコールドスリープさせるべきか、いろいろ迷っています。どうすればこの不思議ちゃんの設定がうまく機能するかですね。そして、リップスと同じように章を立てようとしたのですが、こちらの方がかなり厄介です。

2011/12/03 シナリオや小説の本を改めて読み返しています

半製品ですが、ご覧いただきありがとうございます。なぜ遙香ちゃんが泣くに至ったのか、きっと男子のいじめがあると思います。「身体腐ってるんじゃないかー」とか、悪口雑言言われて傷ついて……というところを考え中です（遙香のセンチメンタル）

2012/03/18 これだけ難産な物語も珍しい

書き始めて何ヶ月になりますか……2年かかっていますね。これじゃあ商業ベースに乗らないなあ……。なにせ、誰も書いたことがない未踏の領域を書いているのですから、他の作品に比べて歩みが遅い。とりあえず辞書で英単語をどうにかしましょうかね。お話の進み方にも依りますが、まかり間違うと「人型最終兵器」になりかねないので、ハプニングをどう笑えるレベルに持っていけるか。そこにかかっています。強さと同時に、キュートさも売りですから。

2012/03/25 お待たせしまして申し訳ありません

これだけ空白が空くと、はて、何を書きたかったのかな、何が言いたかったのかな、という事を随分忘れていきますね。プロットから作りなおそうかな。

2012/03/28 一文字一句を書くことの難しさ……。

まともに教育を（シナリオやら小説の専門学校を）受けていないので、一文字一句が出て来づらいのです。これやったらギャグ漫画になるだろうな、という点もあり、小説としての体裁をいかに保つか勝負です。

2012/04/13 これで解決です。近くのブックオフで、大修館書店の「ジーニアス英和辞書」「ジーニアス和英辞書」が、それぞれ200円で売っていました。とても美本。箱とビニール外したら、もう新品。これで呪文や念力のバリエーションが増えるぜ……といいつつ、今日は金融機関へ行ったり、スーパーで買物したり（普段にはない1万円越えの食料品）、駅前まで行って未納のガス料金を納めたり……これを午前中に全部やってしまったので、お昼から16時まで寝込んでいました。今はただ頭が痛いだけです。

2012/05/23 清水かつらさん作詞の「叱られて」（母がよく、大津の女学校で学年代表で発表会の時に独唱したそうです。のちのち大変えばってました）、それと「のらくろ」関係の楽曲の著作権は、いずれも「著作権消滅楽曲」となっていました。<http://www.minc.gr.jp/> なので、場面の演出に使えます。

2013/04/07 約6400回もご覧いただいた割には更新が滞っています。「リップス」「13号機」「はるか」と3本の連載を抱えていると、いい加減しんどいです。知の源泉が枯渇するというか、何と言うか。社会復帰の準備もしていますので（IT関連の作業所、職業訓練に行くなど）、なかなか深夜まで起きる体力も気力もなく、お待たせしている次第です。結局、新しいコールドスリープ装置に乗って、18歳になった遙香は再び未来を目指すのですけどもね。僕自身、楽しい学園生

活を送ったことがないので、ましてや普通科じゃなく、工業高校だったので、共学というものを中学までしかやっていないのです。なので難しい……。

2013/06/15 超凡ミスをしてしまったことに、いま気づきました。関東電気保安協会の安齊さんと、神奈川県立都筑丘高等学校教諭の安齊先生の名前がバッティングしていました。どうも老人ボケで申し訳ない。そのうち訂正します。何て名前にしよう……。

2013年11月4日

「ぱふ」で白木屋百貨店火災を引き起こしたなら、ピーター・ポール&マリーの”Puff, The Magic Dragon”を無理矢理歌わせればどうなるか、を実験してみました。あの歌は「ぱふ」だらけですからね。新人賞では、著作権に敏感で、審査員がはねる、ということがあらしいのですが、タブーに挑んでこそ田所稻造。1142ダウンロード、7040ページビューは、もう少し頑張れよお前、という叱咤激励だと思っています。本当にありがたいですね。

はるか 一帝都からの声一

<http://p.booklog.jp/book/2553>

著者：田所稻造

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inazotaddy/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/2553>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/2553>